

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：23902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00482

研究課題名（和文）劇作家エデン・フォン・ホルヴァートの亡命生活と後期戯曲の現代的意義

研究課題名（英文）The playwright Odon von Horvath's life in exile and the contemporary significance of his late plays

研究代表者

大塚 直（OTSUKA, Sunao）

愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：70572139

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：劇作家ホルヴァートは1933年のヒトラーの政権掌握後、1938年にパリで事故死するまで約五年の間に九本の戯曲を執筆する。これらの作品は同時代の政治難民・ユダヤ人迫害の問題を取り上げてはいるが、多くは喜劇であり、また改作劇であるため、受容史的に低く評価されてきた。本研究を通じて、後期時代の彼が辛辣で社会批判的な年代記作者という以前の立場を捨て、個人の罪や良心の問題を描く倫理的・形而上的な作家へと変貌を遂げたことが分かった。また最晩年の構想「人間の喜劇」では、変革の時代を描きながら同時代人に新しい「人間性」を呼びかけるなど、ナチ政権と対決する彼の仕事の意義が明らかになってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オーストリアでは国民的作家の扱いを受けながら、日本ではまったく知られていない劇作家ホルヴァートの後期戯曲について、ナチスに対する抵抗から生まれた「人間性」の希求という彼の主要テーマを明らかにした。本研究から、寓意的な手法で普遍的な人間のあり方を描くハプスブルク伝統の舞台芸術について理解が深まると同時に、マス＝メディアの言説や群衆によって馴致されてしまう個人など、ヴァイマル共和政時代に始まり現代に通じる社会現象を考察する上でも重要な知見が得られた。さらに政治的・文化的他者に対する寛容の精神など、彼の作品紹介・研究は今日の難民問題を考える上でも有効だと思われる。

研究成果の概要（英文）：The playwright Horvath wrote nine plays in about five years after Hitler's seizure of power in 1933 until his death in Paris in 1938. Although these works dealt with the issue of contemporary persecution of political refugees and Jews, they had been underestimated in the history of acceptance because they are mostly comedies and adaptations. Through this study, it was revealed that in his later years, he abandoned his previous position as a bitter and socially critical chronicler and transformed himself into an ethical and metaphysical writer who portrayed the problems of personal sin and conscience. In his latest concept, "Human Comedy", the significance of his work in confronting the Nazi regime has become clear, such as promoting new "humanity" to his contemporaries while depicting the eras of change.

研究分野：人文学・ヨーロッパ文学関連 近現代ドイツ語圏の演劇・文化史

キーワード：ホルヴァート研究 ヴァイマル共和政 女性の自己実現・社会的転落 喜劇・戯曲分析 ファシズム・ナチズム 群衆・大衆・小市民 亡命文学・抵抗文学 政治難民・ユダヤ人問題

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 劇作家エデン・フォン・ホルヴァート(Ödön von Horváth, 1901~38)は、1933年のヒトラーの政権掌握後、ドイツからオーストリアへの亡命を余儀なくされる。そして1938年のナチス・ドイツによるオーストリア併合までの約五年の間に、同時代の辛辣な年代記作者という従来の立場を捨て、次第に個人の責任や良心の声に着目するヒューマンズムに満ちた作家へと変貌を遂げる。おそらくは、ユダヤ系を主とする当地の芸術家たちとの交流や共同作業、また政治難民と化した同時代の人びとの過酷な現実が彼に影響を及ぼしたと考えられるが、彼らの多くが後に自殺したり海外へ亡命したりして、重要な抵抗文学の一翼が文化史から抜け落ちてしまっている。後期ホルヴァートの執筆作品や交友関係を中心に現地調査や資料の Recherche を行い、現代に通じる難民問題や、当時の戯曲に秘められた抵抗文学の可能性について改めて検証したい。

(2) ドイツ語圏の演劇といえば、日本ではブレヒト、ミュラー、イェリネクといった啓蒙左派路線の戯曲が有名であるが、ホルヴァート、シュトラウス、シンメルプフェニヒのように同世代の「年代記作者」であると同時に、憧れや絶望など人間存在の永遠の実相を描き出そうとする詩的路線もある。1960~70年代にルネサンスを迎えたホルヴァートだが、当時注目を浴びたのは、ラジオや新聞などマス=メディアによって馴致されたヴァイマル共和政末期の小市民たちの姿を批判的に活写した中期の戯曲群であった。しかしその一方で、ホルヴァートには小説『神なき青春』(1938)のように、ナチ時代と真っ向から向き合った作家というイメージがあるが、後期作品は亡命生活により疲弊した作品群という否定的な位置付けを受けて評価が分かれてきた。

(3) オーストリアでは国民的作家の扱いを受けながら、日本ではまったく知られていないホルヴァートの後期戯曲を検証することで、ナチスに対する抵抗から生まれた「人間性」の希求という彼の後期の作家活動の主要テーマを再考する。その過程では、おのずとヴァイマル共和政時代の退廃的なドイツ・ベルリンとはオルタナティブをなす寓意性・物語性を重視したハプスブルク伝統の舞台芸術を考える上で重要な知見が得られるとともに、政治的・文化的他者に対する寛容の精神など、現在の難民問題を考える上でも有効な示唆が得られるだろう。

### 2. 研究の目的

(1) 自国ファーストや右傾化などの言葉が頻りに聞かれるようになり、さらにはロシアによるウクライナ侵攻まで起きるなど、排他的暴力や難民問題について改めて考察せざるを得ない社会情勢が続いている。政治的・文化的他者を排除する極端な例証としてナチス・ドイツによるユダヤ人迫害という人類史上の負の遺産を改めて想起・検証する必要がある。同時代を生きた作家たちはどのように群衆に対して抵抗する姿勢を取れたのか。本研究では、ナチ時代に自らが亡命作家となった劇作家ホルヴァートが1933年以降に書いた後期戯曲を検証していくことで、社会の中の個人一人ひとりの罪や良心の問題に着目した作家の心の軌跡を辿り直すと同時に、現地視察などを通じて当時の知られざる交友関係なども洗い直し、ナチスへの抵抗活動の中で生み出された後期作品の意義や独創性を再検証する。

(2) 亡命以降、ホルヴァートは作品が上演されなくなったドイツから自身の出自でもある旧ハプスブルク帝国へと次第に回帰していく。「オーストリア理念」を有する同帝国は、そもそも多民族国家であって、極端な人種政策を掲げたナチス・ドイツとはまったく異なる政治的・文化的可能性を擁していた。次第に人間性を擁護していく作風に転じる中で、ホルヴァートもまた、ウィーンの民衆文化を継続・発展させる方向性でライムントやネストロイ、そしてモーツァルトに代表されるウィーン舞台芸術の軽快さ・喜劇性に着目して、『フィガロの離婚』や『戦場から帰ってきたドン・ファン』などを書いている。またオーストリアで彼は反ナチの旗幟を鮮明にした人道主義的・平和主義的な芸術家・政治的亡命者たちと交流を持っていた。ナチ時代において失われた、当時のもうひとつの伝統に即した演劇文化の可能性についても考えてみたい。

### 3. 研究の方法

(1) まず本研究の基盤として、ホルヴァートの直筆原稿をすべてファクシミリで複写し、その作品生成の過程を審らかにした新ウィーン全集版の当該資料、および当該作家に関連する研究資料を購入・蒐集していく。次に、作家の交友関係を洗い出すための現地調査を行い、当時の抵抗作家たちの活動が現在、どのような形で記憶・継承化されているか、確認する。(2) 具体的には、作家のゆかりの地である南ドイツ・ムルナウ古城博物館のホルヴァート常設展示や、ザルツブルク・ヘンドルフにある文学資料館などを訪ね、亡命作家に関する現地パンフレットを調査・蒐集する。ウィーンやベルリンでは亡命時代の滞在先を訪ねるなど現地 Recherche を行う。ウィーン文学資料館では後期戯曲が上演された際のパンフレットなどをコピーする。メディア資料館では、映像資料を鑑賞して、演出の点からも現代的意義を解き明かしていく。

#### 4. 研究成果

(1) 当該研究の事業期間だが、一年延長を加え、平成30年度～令和3年度の四年間となった。初年度は海外で現地視察を行い、南ドイツ・ムルナウの古城博物館、オーストリア併合までナチスに敵対する亡命作家たちが多数集っていたザルツブルク・ヘンドルフにある文学資料館、およびミュンヘン市立図書館モナセンシアなどを訪問した。二年目も、ハンガリーのブダペストや、オーストリアのウィーンに渡航して、亡命時代の作家の滞在先を訪ね、現地の資料館では関連する資料を蒐集した。三年目と四年目は折からのコロナ禍で海外渡航はできなかったが、ユダヤ系の政治難民について理解を深めるため、福井・敦賀ムゼウムや福山・ホロコースト記念館を見学、ナチ時代のレイシズムの問題を考察した。また渡航費用として計上していた予算で新ウィーン全集版の既刊など、ホルヴァート研究に関連する図書資料およびメディア資料を蒐集した。

(2) 当該研究により、合計九本の後期戯曲は、以下の三つのブロックに整理できることを確認した。まず、同時代の現実を描く社会批判的な作風から幻想的・形而上的な作風へ移行する転機となった『セーヌ河の身元不明の少女』(1933)と、そのパロディで降霊術などをめぐる映画会社の陰謀劇『一押し、二押し』(1935)、およびライムント風の魔法劇であると同時に、演劇界の内輪話でもある『天国めざして』(1937)である。次に、居場所を失くした難民劇であると同時に軽快な音楽劇の伝統にカテゴライズできる、ネストロイの茶番劇を意識した作品『行ったり来たり』(1934)と、モーツァルト・オペラの脚色である『戦場から帰ってきたドン・ファン』(1936)、および『フィガロの離婚』(1936)である。最後に、最晩年の構想『人間の喜劇』に組み込まれた三作品『最後の審判の日』(1937)、『男のいない村』(1937)、『ポンペイ』(1937)である。これら九本の後期戯曲はいずれも改作物であり、ジャンルとしては喜劇的な作品が多く、実は変革の時代を扱っている作品が多い。旧ハプスブルク帝国の舞台芸術や、ハンガリー文学の伝統に沿いながら、作家自身が社会批判よりも、特にナチ教育を受けて育った同時代の若者たちのために、人間のあり方・生き方を伝えようとする理想主義的な作風に転じていったことが分かった。

(3) その中で個別に検討した作品を列挙していく。まず、『戦場から帰ってきたドン・ファン』をめぐる論考。西欧の文化史で有名なドン・ファン像の歴史の変遷を論じながら、なぜナチ政権の成立後にホルヴァートはこのモチーフを取り上げたのか、初期の草稿からヒトラーへの暗示などを明らかにした。また、音楽劇『行ったり来たり』をめぐる、オーストリアの先輩作家ネストロイからの影響を審らかにすると同時に、ナチ時代にドイツから多数亡命したユダヤ系の舞台人たちの受け皿となったスイス・チューリヒ劇場での初演などを論じた。また、本作品の音楽を監修した、自身が亡命者となったユダヤ系作曲家ハンス・ガルについても本格的な調査を行い、その成果をシンポジウム+レクチャーコンサートの形式で、2019年度に広く公開した。

(4) ホルヴァートが後期作品とともに出自であるハプスブルクの文化圏へと回帰していった背景を探るために、同じバイエルン州の作家グラーフやブレヒトらと亡命期の行動を比較考察する論文を執筆した。結論として、バイエルン革命を経験した同州からのナチス台頭に危機意識と責任を感じていた左翼系の作家たちに対し、ホルヴァートはハンガリー出身の作家という一匹狼のポジションで、大きな政治よりも歴史的状況下で圧殺される個人に強い関心を抱いていたことが分かった。また、2021年のホルヴァート生誕120年を記念して、劇団・東京演劇アンサンブルから代表作『ウィーンの森の物語』の翻訳・ドラマトゥルクの仕事依頼された。事前学習会でのレクチャーや、上演後のアフタートークなどを通じて、研究対象の作家について一般の方々にも広く紹介することができた。また公演を通じて、従来は外部世界の行動に劇的葛藤を求めてきた西欧の劇作家のうち、ホルヴァートはビューヒナーと同様に、登場人物の内面世界、言葉から意識を炙り出すことで個人の心の劇的葛藤を表現しようとしていたことが確認できた。

(5) 最終年度に中期の代表作『ウィーンの森の物語』を当時の女性の自己実現と社会的転落という視点からまとめた論考、および後期戯曲へと踏み込んだ重要な戯曲『セーヌ河の身元不明の少女』をそれまでの女性主人公とは異なる、古典の文学作品を下敷きにした新しい自立した女性像として検討した論考、合計二本を発表した。さらに最晩年のプロジェクト『人間の喜劇』をめぐる、これまで個人を描く作家と見做されてきたホルヴァートだが、新全集版の知られざる草稿から「わたし達」という思想や人間愛について作家が考察を深める資料を発見した。『人間の喜劇』に関しては、同時代人に対して新しく「人間性」を呼びかける試みであったなど、現在まとめた論考を準備中である。劇作家ホルヴァートは、内省することなくプロパガンダに流された同時代人びとの実態を言葉や意識の観点から記録・描出し続けた劇作家だが、後期作品『われら時代の子』(1938)では、言語学者クレンペラーが『第三帝国の言語』(1947)で論じたような、簡潔な言い回しを反復するような手法で主人公の意識が綴られていく。ナチ時代に流布した常套句や装飾的言説をホルヴァートがどのように捉え問題視していたかを検証すれば、現代メディア社会を考察する上でも広く有効であると考えられる。これら一連の研究を通して、群衆や人種差別の問題と向き合ってきたホルヴァートの仕事の意義が明らかになってきた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大塚直	4. 巻 第52号
2. 論文標題 「亡命時代のボヘミアンたちのラブソディ グラフ、プレヒト、ホルヴァートのミュンヘン時代とその後について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』	6. 最初と最後の頁 13～26頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大塚直	4. 巻 なし
2. 論文標題 エッセイ「強要される「女子力」？ この時代の女性の物語」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京演劇アンサンブル『ウィーンの森の物語』公演パンフレット	6. 最初と最後の頁 5頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大塚直	4. 巻 第51号
2. 論文標題 後期ホルヴァートのドン・ファン像 ヴァイマル共和政時代の女性たちが望んだ恋愛について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』	6. 最初と最後の頁 1～14頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大塚直	4. 巻 第51号
2. 論文標題 日付をもつ音楽作品たち レクチャーコンサート「プレヒト・詩と音楽の夕べ」を企画して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』	6. 最初と最後の頁 145～152頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚直	4. 巻 第49号
2. 論文標題 劇作家ホルヴァートと音楽家ハンス・ガル 国外追放者をめぐる音楽劇『行ったり来たり』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『愛知県立芸術大学紀要』	6. 最初と最後の頁 37～56頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34476/00000725	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大塚直	4. 巻 第53号
2. 論文標題 劇作家ホルヴァートと『ウィーンの森の物語』 ヴァイマル共和政時代における女性の自己実現と社会的転落をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』	6. 最初と最後の頁 1～14頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚直	4. 巻 第51号
2. 論文標題 デスマスクの永遠の微笑み 劇作家ホルヴァートの『セーヌ河の身元不明の少女』と『一押し、二押し』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『愛知県立芸術大学紀要』	6. 最初と最後の頁 109～128頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34476/00000859	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大塚直
2. 発表標題 「劇作家ホルヴァートと『ウィーンの森の物語』 ヴァイマル共和政時代の女性の解放と転落をめぐって」
3. 学会等名 東京演劇アンサンブル・公開事前学習会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚直
2. 発表標題 アフタートーク「東京演劇アンサンブル『ウィーンの森の物語』ホルヴァート生誕120年記念公演」
3. 学会等名 2021年3月13日の公演終了後、東京芸術劇場・シアターウエストにて
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大塚直
2. 発表標題 劇作家ホルヴァートと音楽家ハンス・ガル シンポジウム+レクチャーコンサート
3. 学会等名 科研費による研究成果発表会（愛知県立芸術大学・室内楽ホール）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚直
2. 発表標題 レクチャーコンサート「プレヒト・詩と音楽の夕べ」～ナチ時代に亡命したユダヤ系の音楽家たち
3. 学会等名 愛知県立芸術大学・平成30年度芸術講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大塚直
2. 発表標題 劇作家ホルヴァートの戯曲『行ったり来たり』について
3. 学会等名 ドイツ戯曲研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 畠山寛・吉中俊貴・岡本和子編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 268ページ
3. 書名 ドイツ文学の道しるべ ニーベルンゲンから多和田葉子まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------